知の翼、霊の翼

深谷　美枝

大学教員の傍ら、物好きにも神学生になってみて、もう三年にもなった。来年は最終学年である。専門外の学問をするということは、少なくともその最中は本業の効率を落とすことは否めなくて、溜まりに溜まった原稿にいつも追われている。しかしそのことが却って怪我の功名というか、知的好奇心を近年になく増大させることになって、脳年齢が十歳も若返ったような気がしている。

知性もさることながら、在籍する神学校は日本キリスト教団認可神学校だが、リベラル、ラディカル系の教員を多く擁する学校であった。自然、プロセス神学、フェミニスト神学、解放の神学などの刺激を三年間受け続けることになる。正統派神学で育った大半の神学生は、そうした授業が結構苦痛で、当初「宗門改め」「踏み絵」などと冗談めかして呼んでいたものだが、気が付いてみるとリベラル、ラディカル系の発想が、無意識にそこからのスタートを強いられていた「擦り込み」の束縛—殆ど呪縛というか霊縛に近いもの—からいつの間にか自分を解き放っているのに気が付くことがある。

一例だが、聖書解釈学ではフェミニスト神学者が、聖書の批評を多様な批評学の枠組みで行う講義をしていた。聖書解釈方法の多様性が示され、「どこから見るかによって何が見えるかが違う（グスタヴォ・グティエレス）」という言葉を引用しつつ、誰もが潜在的に持つイデオロギーを自覚して聖書と向かい合うことが強調された。そこで学んだことは教義の摺り込みから解

き放たれて、自分の立ち位置を意識化し、創造性を以って聖書を読んでいいということであった。

四十半ばを過ぎて既に開拓伝道をしている身としては、神学的にそれほど強く揺すぶられたわけではない。しかし、どこから見ても教義的には正しいが潤いのないメッセージを語る必要がないこと、どこに立ってものを見るのかを意識化し、明確に打ち出していいということだけは残った。個人的な文脈でいえば、人生の半ばで障害を与えられた人間としての立ち位置や神秘主義的傾向を持つ信仰者としての立場性というものを明白にしていいのである。また社会福祉実践者中心の、そして鬱病や社会的にはみ出しかけた青年のコミュニティーという文脈の中でそこへ向けて語っていいのである。いずれにせよ、その立場で体験することを抑圧する必要はなく、与えられたメッセージを語っていいということである。

それは思いがけずに与えられた知の翼であると同時に、信じ祈り、かつ生きていくための霊の翼でもあった。

（ふかや　みえ　所員・社会学部教授）